

エコハウス研究会季刊紙

そらどま

2026年
春号
第25号

2026.SPRING vol.25



■主室と時間を編む住まいー横井上の家
木造2階建て(SE構法)
延床面積:128.71㎡(38.93坪)
離れ:4.14㎡(125坪)
ガレージ:18.52㎡(5.60坪)
合計:151.37㎡(45.78坪)
建築設計:藤原昌彦+バウムスタイルアーキテクト一級建築士事務所
構造設計:株式会社エヌシーエヌ
造園設計:荻野寿也+荻野景観設計
施工:株式会社フタバ
設計期間:2023年11月~2025年5月
施工期間:2024年10月~2025年9月

藤原昌彦
Masahiko Fujiwara
バウムスタイルアーキテクト代表取締役/一級建築士
昭和50年2月27日生まれ。岡山県立倉敷天城高等学校卒業後、香川職業訓練短期大学校建築課程卒業。建設会社・工務店時代に、独学にて建築・デザインを学ぶ。平成23年4月より独立し、バウムスタイルアーキテクトを設立。屋根のある建築作品コンテスト2019 住宅部門 最優秀賞など受賞。
趣味は建築散歩。

エコハウス研究会季刊紙
そらどま
2026.SPRING vol.25

ご報告
2026年1月15日
理事会を開催しました。
2026年2月10日
幹事会を開催しました。
2025年12月11日・12日
第12回全国大会を開催しました。

代表理事 丸谷 博男 (株式会社エーアンドエー・セントラル代表取締役)
理事 丸谷 晴道 (丸谷建築研究所代表)
理事(事務局長) 磯貝 左千夫 (株式会社ジェイボックス代表取締役)
エコハウス研究会 会報 2026 年春号(第25号) 2026年 4月 10日 発行



CONTENT

バウムスタイルの家とそらどま
藤原昌彦+バウムスタイルアーキテクト一級建築士事務所

表紙 主室と時間を編む住まいー横井上の家
設計 藤原昌彦



SORADOMA



主室と時間を編む住まい ————— 横井上の家



baumスタイルアーキテクトの藤原さんの姿勢と仕事

その姿、その取り組み方、そして人間性。言葉にはなかなか
ならないが、ただ感心させられる。それほど大きな声で主張
するような能弁化でエネルギッシュな人間ではない。
滲み出ると言った方がよい。構想され、作り出される空間、
環境、その空気はなんとも言えない優しさと、深い思慮の集
積を感じる。建築家であり、施工者であるとともに、空間の詩
人でもある。
ただただ、心から賛辞をお伝えしたく今回、皆様に紹介をさ
せていただいているのです。
私の言葉はこれ以上、必要ありません。これから紹介する氏
の言葉と空間をお受け取りください。

丸谷博男



ご夫婦と3人のお子様に住まう住宅である。
主室と中庭を中心に捉え、家族の気配を感じながらも
自然が感じられる住まいを計画した。

敷地は、約40年前に開発分譲された住宅地の一面にあります。
既存の住宅と石垣を解体し、造成とアプローチの再編を行いな
がら、敷地の持つ高低差や周辺環境をあらためて読み直すこと
から、この住まいの計画は始まりました。
この家では、家族が日常の中で最も長く過ごす「主室（リビング・
ダイニング・キッチン）」を住まいの中心に据えています。
敷地は前面道路より約1.2m高く、その高低差を活かして、道路
側を平屋、奥を二階建てとし、主室と中庭を敷地の中央に配置
しました。

中庭は、単に光や風を取り入れるための庭ではなく、主室と一
体となった生活の場として計画しています。室内と屋外を行き
来する中で、植栽や光、風の気配が自然と感じられ、家族が互
いの存在を意識しすぎることなく、緩やかにつながる距離が
生まれます。
また、断熱や開口、設備計画を総合的に整えることで、室内の
温度が急激に変化しにくい、穏やかな環境を目指しました。冷
暖房には輻射の仕組みを用い、空気を強く動かさず、空間全体
を包み込むような心地よさをつくっています。
この住まいは、完成した瞬間が最も美しい家ではありません。
家族の暮らしが積み重なり、季節や時間の移ろいとともに、
ゆっくりと馴染み、成熟していくことを大切にしたい住宅です。

 Fujiwara Masahiko + Baum Style Architect
株式会社baumスタイルアーキテクト一級建築士事務所

エコハウス研究会 特別誌
そらどま
2026.SPRING vol.25

